明治卅六年四月二日第三種郵便物認可　毎月一回二日發行

家庭雜誌

第貳巻
第十二號
明治三十七年二月二日發行

由分社
東京市麹町區中六番町十番地

●本誌定價及廣告料

一部	一ヶ月	六ヶ月	一ヶ年	全國
金六錢	金六錢	金卅二錢	金六十錢	無遞送料

廣告料――特別一頁七圓、普通一頁五圓

注意

一、本誌は毎月一回（一日）發行とす。
一、本誌の購讀料は小爲替を以て御遞送の事。但し郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事。
一、購讀者は住所姓名を詳細に記して申込まれたし。又轉所の際は新舊の宿所共併せて御通知あるべし。
一、爲替振込局並に受取人は無指定にてもよろし。

明治三十七年十一月廿九日印刷
明治三十七年十二月一日發行

發行兼編輯人 東京府豐多摩郡千駄谷村字原宿百九十一番地 西村惠治郎

印刷人 東京市京橋區日吉町十番地 中村彌助

發行所 東京麴町區中六番町十番地 由分社

大賣捌所 上田屋 良明堂 東京堂 東海堂

印刷所 東京市京橋區日吉町十番地 近藤商店

壽美禮おしろい

登錄商標

五二會品評會功勞銅牌

THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE
ウワイオレット煉製
錫蓋附 乳白硝子器入
壽美禮おしろい





●壽美禮おしろい　れり製定價（大罎　二十錢／小罎　十二錢）　水製定價（大罎　二十五錢／中罎　十五錢／小罎　十錢）

ヴワイオレット水製

錫栓附乳白硝子壜入



すみれ白粉は　歐米諸國に專ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素の新成蹟體等を以て配劑しあるを以て皮膚を艶麗ならしめ芳香馥郁として長時間保續するの特性あり『壽美禮白粉』は常に用て御顏肌等の色を白變せしめきめをこまやかに、にきび、そばかすあせも等を生せす御肌へを清々しく天然の色白きに至るべし『菫おしろい』は芳香馥郁と長く保つが故宴會祝席雜踏の場所に臨て諸々の惡臭を退け不淨を拂ひ心氣を清爽快活ならしめ衛生上有益無比の逸品なり『壽美禮白粉』は高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方今東京横濱に於て上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

●皮膚艶白劑壽美禮あらい粉

●綠、藍、紅彩蝶番ひボックス入三錢　鑵詰　六錢五厘　袋入　壹錢

●弊舖製造の壽美禮洗粉の義は方今歐米諸國に專ら賞讃する香料及弊店新製の原料を用ひて製せし物なれば朝夕此洗粉を御用ひ給へば漸々皮膚の色を白くし美くして艶を出しきめをこまかに常に御肌を清々しくなし總而皮膚の患ひにかゝる事なし

●常に髮洗ひに用ひ給へば毛の拔る病を豫防し毛のくせを直し美くして艶を出し髮のればりを取り油あかふけ等を生せす又絹綿布等に用ひて能く汚垢を落す總て物を漂白する性あり

●使用法は普通あらひ粉の半分にて能し水又は温湯に溶し又はぬかに混せ入浴の際用ふるを宜とす

登錄商標

西洋色白くなるあらひ粉

SUMIRE.
Washing Powder

壽美禮あらい粉



製造本舖

東京東兩國
元町兩國橋通り

伊勢吉壽美禮堂謹製

販賣所は全國到る處小間物店化粧品店賣藥店其他各勸工場各劇場運動場に有り

沈默と多辯

眠柳學人

筆に長ずる者は文章即ち言語の如く、舌に長ずる者は言語即ち文章を成すと古人は言つた。よしや我毎に發する一言一語が、直に大なる文章を成すまでにいたらずとも、切めては己が思想を遺憾なく發表して、他人に能く通じ得るまでには饒舌りたい。カーライルは沈默の徳を稱へて、沈默は無窮の如く深く、談話は時間の如く淺しと言つた。ホーマーも思慮なき人は常に談ずと言つた。ポープも亦言語は宛かも木葉の如く、其最も繁茂する時は菓實少しと多辯を戒めてゐる。いかにも多辯は悪い『禍は口より出づ』とあつて、饒舌り過ぎるのは決して宜しくないが、始終沈默の徳を稱へたカーライルは訥辯家ではなかつた。講壇の彼は雄辯滔々卓爾風發の慨が有つた。即ち彼[illegible]を成したのである。但河海抄に所謂『言多けれは品少し』とあるやうに、多辯は動もすると吾人の品格を損じる。多辯の人は信實がないといふことは、何人も實驗して知るところである。多辯の結果は必ず嘘を吐くことになる。必ず他人を誹謗することになる。故に許魯齋は君子は己を省みる、胡んぞ人を毀るに遑あらんやと言つた。沈默の徳は玆だ。

然し人と人との交際が漸く盛んになつて、生存競爭が漸く烈しくなつた今の世は、言語は吾人の唯一の武器である。言語と知識とは其進歩を同じくするを要する。言語は恰も我精神の劔を藏むる鞘である。必要な場合には是れを拔いて身を護らなければならぬ。吾人は沈默の徳を養ふと丶もに、辯舌の修練にも力を用ゐなければならぬ。今の世は女子でも可羞んでのみゐては、家族的交際も何も能きぬことになる。米國の女子は饒舌を以てソシャル、レデーの一要件としてゐる。彼等はソシャル、レデーと言はれたいばつかりに、英

文學は勿論佛語、獨乙語、さては希臘語羅甸語までも囓つて、應接が巧に能きるやう、對談が流暢に能きるやう、人知れぬ苦心をしてゐるさうだ。もとより男女とも多辯を惡德とする日本では、此例外の米國女學生を眞似るには及ばぬが、世は識らず知らずのうちに大分進んで來てゐる。己の告げることが他人に解らぬやうでは困る。解らぬなら尙しも誤解され曲解されぬとも限らぬ。言語は明晰を尙ぶ。楠正成の家訓にも『物言へば聞えるやうに言へ』とある。聲の半ば口の中で消えるのは甚だ聞ぐるしい。性來訥辯な男女は一通り饒舌れるやうに修練すべきである。怯めるとか臆するとかいふのは其人の天性だが、習慣は優に其を破る力を有つてゐる。その證據にむかしから訥辯な人は、社會へ顏を出さない人に多い。もつとも女子には社會へ顏を出さなくとも、隨分達辯な人が多いやうだが、文士とか學者とかいはれる人には訥辯家が多い。これは大した不便は感じまいが饒舌れるに越したことはない。現に吾人の友の文士學者にも口に訥な人が少くない。

西洋でもスケッチ、ブックで名高かいアービングは、演說の草稿を眼前に展げて置いても、すら〱と演說することの能きないやうな訥辯家であつた。哲學者のデカートも甚だしい不辯舌家。チヨーサーも語を操ることが頗る拙劣で、先生は默つてゐた方が價値が有ると或夫人に笑はれた。又アヂソンは國務大臣として衆議院で演說を試みたが、『議長、本官は思ふ——本官は思ふ、議長閣下——議長閣下、本官は思ふ』とまでは言つたが、その後が如何しても發なかつたので、議員に嘲られて演說を中止した。猶此他詩人ヴーヂルも、シセロもラムもフオンテーンも、コーチーユもヅライデンもムーアも、サカレーもグレーもスコツトもスチールも、皆、訥辯家として知られてゐる。吾人は此人〱の訥辯を學んではならぬ。

眠柳學人加藤米司君は本誌の名譽社友で、婦人問題には常に熱心なる態度を以て、これが解釋に衝り、意見を主張する所謂我黨の士、第一卷の中には種々有益なる寄書があつた。

さて、記者は學人の一文を讀んで、少しく思ひ當

つた事がある。それは、我國の家庭が昔から多く沈默の家庭であつたと云ふ事。そして、その沈默と云ふ文字に含まれて居る意味が、どうも多辯に對しての言葉でなくして、無言、無口と云つたやうな意味の方が半以上を占めて居はすまいかと思ふので。無言、無口の隣家は寂寥で、やがてそれは秋の景物である。若くば冬枯の景色である。

夫は妻に對して成程口は利いたであらう。けれどもそれの多くは命令の言葉であつた。親は子に對して嚇す事抑へる事はしたであらう。けれども親の威權を示すと云ふより外にまづ一歩も出でなかつた。主人は召使を叱飛ばす事はあつたかも知れぬが、相手を賤み人並の口も交はさぬのは、今日も尚ほ同じである。家庭と家庭との交際とても、或點迄は行はれて居たかも知れぬ。けれどもそれは實に止むを得ぬと云ふ交際で、ほんの義理の上から危く成立つて居たものと云つても宜い。大抵の家庭の交際觀は、可成的手を擴げぬこと、他人を見れば盜賊と思へ、何事も「内部丈で〳〵」と云ふ主義であつた。

知るべし、日本の家庭は多く沈默の裡に成長し、何時も霜枯のやうな景物の中に發育して來たのである。其所には咲き亂れた艶陽三月の花がない。蝶も飛ばぬ鳥も歌はぬ。太陽は每に冷い光線を投げて居る。云ひ換ゆれば、畢竟溫かい感情の流露が缺けて居たのである。

記者は惡き意味の多辯を好まぬが、この美しい賑やかな感情を發表するには、いくら多辯であつても差支へないと思ふ。夫婦の間にこの多辯が絕えたならば、それと同時に心の愛は消えて了ふ。最愛し〳〵の情懷を其夫なり、妻なりに寄せるには、誰に何の遠慮もいらぬことである。親と子供の關係は何時迄經つても矢張親と子なので僅かばかり學問したからとて、何も子が大人ぶつて見せすとも善い。戀しい時には自由に其感情を發露させるが本來である。兄弟姉妹に於て然り、主從に於て然り、家庭と家庭との間、人と人との間に於て特に然り。

記者はこの惡しき意味の沈默に代ゆるの善き意味の多辯を以て一生を送りたいものである。

日本の家庭道德

（服從に責任あるを要す）

安藤生

我國の家庭に於ける道德の基本は服從に在りとは人の皆云ふ所なるか、さて其服從主義の道德は果して最良最美のものなるが、又假令從來は最良最美のものとして認められ居りしとするも、將來に於て果して最良最美のものなりと認め得らるべきか否や。換言すれば、時代思潮の大に變遷せし現時及び變遷し行くべき將來にも猶は從來の服從主義を以て道德の基本とすべきかとの疑問は、心ある人々の大に考慮を費しつゝある所なるが如し。

「妻たるものは絕對的に其夫に服從すべし。子たるものは絕對的に其親に服從すべし。家族たるものは絕對的に其家長に服從すべし。是れ美德也。之に背くは大なる不埒也、惡德也、曲事也」とは從來一般に思惟せられたる所にして、妻に對する夫の至上權、子に對する親の至上權、家族に對する家長の至上權が我邦社會

の是認する所たりしは疑もなき事實なりとす。此習俗の結果は、社會の安寧秩序を保つに於て尠からぬ利便を與へたるべく、又尊敬すべき貞婦孝子等を出せしにも與つて大に力ありし事なるべきは勿論なりと雖も、今日の如く教育普及の結果として、人々皆多少獨自一個の觀念を有するに到れる時代に在ては、かゝる習俗が到底永く其勢力を維持する能はざるは自明の理にして、從て在來の思想は漸次新思想の爲に其地步を讓らざるを得ざるに到りしは欣賀すべき事なりとす。故に予等は益々普通教育の發達して人は何人と雖も先づ其人たるの點に於て同一地點に立つものなることを了解するに到らんことを希望するものなり。然れども若し予等の此言を誤解して直に長幼の序を破り、夫婦の別を紊り上下の禮を亡ぼすも差支なきかの如く思惟するものあらば、是れ予等の本懷を去ること遠しと云ふべし。同一地點に立てる同一列の人々と雖も既に上下長幼夫婦等の差異の存在する以上は、其差異に對して相應の秩序を設けざるべからざるは勿論の事にして予が

本意は畢竟親の子に對する、將た夫の妻に對する過度の權を非認するにある也。『如何に不道理にても親たるが故に子は之に服從せざるべからず。如何に非道の仕打をせらるゝも、夫たるが故に妻は之に服從せざるべからず。』との思想を排斥するにある也。かゝる殘るまじき舊風舊思想が今尙尠からず其處彼處の家庭に殘存し居りて、しかも甚しきは之を以て嚴肅なる家庭又は格式ある家庭なりとなし、傍らより之を稱揚し敬重するものさへあるは、洵に怪むべき也。試に眼を所謂中流以上の家庭に放ち見よ。此種の驚くべき事例は夥しく映出するなるべし。思ふにかゝる絕對的服從は將來決して健全なる家庭の風氣を養ふ所以にあらずして、延て日本の新文明をして健全ならしむる所以にあらざるべし。故に予は一方に上下長幼夫婦の差別の點を無視せざると同時に、更に多く上下長幼夫婦の無差別を無視せざらんことを希望す。道理の前に低頭し、非道を排斥すべきは、上下長幼夫婦の間なりとて些も遠慮會釋を要せざる也。夫れ然り、御無理を御尤もとして無責任なる服從をなさゞるの用心は將來健全なる家庭の風氣を養ふに於て最も必要にして、其服從に主張あり、其服從に責任あり、其服從に理解ある上下長幼夫婦の間柄こそ、健全なる新文明を築くの唯一の基礎なりと信ず。主張あり、責任あり、理解あるとは何ぞや、他なし、自己を夫又は親たるもの、所有物として考へずして、一個の人として其品格を全くし、而して人たるの判斷と確信を以て長上に服從するの謂なり。思ふに、不道理と見えたらば、一應も二應も之を爭ふが子たり將た妻たるもの、責務ならずや。服從の德よりは予は己が責務を完うするの德を重んぜんとす。自己の責務を盡くす所以を忘れて盲從するは、決して忠實なる服從にあらずして、寧ろ卑屈且つ橫着なる服從なり。かくては何の處に稱贊すべき道德上の價値を認むべきや。予は家庭の可成圓滿幸福ならんことを望むものなれども、姑息にして不忠實なる服從の結果としての圓滿幸福は、到底望むべきに非ざると同時に又決して望も得べからずと信ず。世の子たる人、妻たる人及び親たる人、夫たる人、幸に玆に三顧せられんことを望む。

母乳の話

祿亭主人

一　其成分

母乳は幼兒の爲に唯一の食料となるもので、其成分は人の成長と修繕の爲に何一つ不足なく、糖分、蛋白、脂肪の樣な營養物の外、各組織を構成する總ての鹽類までも、悉く其内に含んで居るのです。併し此成分は總ての母乳に於て必ずしも一樣でなく、甚しき個人的の相違があります。此相違は糖分と脂肪には左程甚しからず、蛋白質に於て非常の差異があります。

二　牛乳との比較

母乳は牛乳よりも稀薄に見えますが、實際は牛乳よりも多くの固形分と少量の水を含み、其比重も一〇三二と一〇二九の割合で、母乳の方が重いのです。此固形分の内には糖と脂肪が甚多く、蛋白質(カセイン)の量は甚少くして牛乳の五分の一にも及びません。牛乳のカセインは其量が多いのみならず、性質に於ても

母乳のそれとは非常に違ひます。母乳の方では之が胃酸に逢ふても少さき凝塊となるのみで、弱き小兒の胃にも消化し易く、牛乳のカセインは大なる凝塊となつて容易に消化せられません。故に牛乳へ其三分一の水と少しの砂糖を加ふれば、稍母乳に似たものとはなりますが、小兒の爲め消化の難易は同日の論でなく、止を得ぬ場合の外は其代用物と爲してはいけません。殊に夏期に際し小兒の胃腸病のはやる頃、假に母乳を離して牛乳を用ふる時は、回復し難き胃弱や下痢を引起すの恐れがあります。

三　乳の分泌

乳は短時間を隔て丶子に吸はすれば、其分量が多くなり、其性質も濃くなつて、之に含むカセイン糖バタの量が著しく增して來ます。一度のませる乳にも、初めに出るものは甚薄く、終りに出るもの、則ち新しく分泌した方が餘程濃いものです。これは乳が分泌してから長く乳房に溜つて居る間に、固形分の方が先づ吸收せられ、水分が多く殘つて居る故です。

四　乳をのます法

右の事實によつて母の學ぶべき教訓は、第一小兒が乳を呑み過ごして之を吐き、又下痢する樣な場合には、其量を少くし且つ其性を薄くする爲、成るべく哺乳時の間を長く隔てる事。第二若しも乳があまり薄くして小兒の營養が良くないと思はゞ屢々くり返して呑ませる事です。尙乳を呑ませる時間につき一般に應用すべき規定を申しますれば、初めの一ケ月は一時乃至一時半毎、第二ケ月から四ケ月は二時間毎、それから追々小兒が成長して、胃の容量が大きくなるに從ひ三四時間以上を隔てゝも宜しい。但し右は唯晝間だけの事で、夜分は初めから一度か二度、則ち母の睡眠を妨害せぬ程に呑ませば不足はありません。

多くの母、殊に若き婦人方は、其子を愛するの餘り、際限もなく子の世話を燒かんとし、夜と言はず晝と言はず一時間も半時間も隔てず、自分も休まず子も休ませず、乳をのませるのを見受けますが、それでは知らず〳〵子の消化機を害して、多くの苦痛を感せしめ、泣けば泣く程哺乳を頻繁にして益〳〵小兒を害する事になります。私は屢々斯の如き場合に逢ひ、小兒の腹部が非常に膨滿して居るを認め、之に乳を與ふる事を禁じて灌腸を行ふて見ましたが、其結果多量の瓦斯と消化せざる乳の固塊とを排出して、全く小兒の苦痛を緩快させました。

五　母乳と子の年齡

子が生れた時は母乳に含む蛋白質の量少く、それから漸々增し、二ケ月を過てからは殆んど同一の量を保つて居ます。其內に含む鹽類の增加する割合も大凡この通りですが、糖分は全く之と反對で、最初一二ケ月間に最も多く、子が大きくなるに從ひ少しつゝ減つて行きます。脂肪の量には一定の增減がなく、時々刻々變化に極りがありません。故に至極精密に考ふる時は、小兒に最も適當なる乳は、其子と同一の時刻に生れた子をもつ母、則ち實母の乳に限るので、他より乳母を雇ふにも、其分娩時と子の年齡を對照して見るのが一つの必要な事になります。

て村にありましたと尋ぬれば、お客様の爲めわざ〳〵藤岡町まで行つて買つて來ました。家の者も三年振で米といふものを見ましたと笑ふのです。嗚呼此時の『笑ひ』何といふ悲慘な笑ひでしよう、所謂悲み極まつての泣笑ひ、世にこれほど切ないものが又とあるでしようか。

◎水害を防ぐ爲め防水工事を起して下さいと、長年の間政府と議會とへ請願しても、お聞入れがない以上は今更仕方がない。此上は村民力を合せて、不充分ながら自ら工事に取り掛らねば、此冬を如何にして過すべきか。寧そ死ぬなら村民一同堤防を枕にして死ぬのが本望なりとは、既に村民の一致した決心で、一行中の大島氏は、次の日から其準備にかゝると言はれてゐました。

◎此日もまだ雨が歇まず、路はます〳〵惡くなるばかり、女の足では所詮巡覽は覺束ない故、一行の人々に別れを告げ、幸德夫人と幸內氏と私と三人は兩國行の汽船に乘りて、また都の人となりました。（をはり）

子供の遊戯

花骨牌を利用して多人數の遊べる方法を新案しました。まづ十二人の小供を一室に集め、それへ一々花札（一月より十二月迄）を與へて、輪をかゝせます。そこで、別に中央に一人、此人が面白い話を出鱈目にしやべり立てる。そして其話の中へ「松」とか、「雨」とかの呼名を入れるのですが、それに呼ばれた人（花札を持つて居る人）は即座に立上つて「はい。」と返事をせねばならぬ。若し此時茫然して居て、呼ばれても起たなかつたり、又飛んでもない時に立上つたりしたならば、其人は負けになるのです。それ故、中央の人は其負けた人に藝をさせるか、墨を附けるか、それは定め次第で、何とでも興味が付けられます。

こゝに一寸注意して置くべきは、中央の人の話の仕方です。假令へば次のやうにせねばならぬ。『……それから私は眞暗闇の庭へ飛び出しましたが、忽ち私の目とも云はず、鼻とも云はず、痛々しく私を刺てかゝつたものがありました……』と云つて、暫時猶豫し、さて改めて『それは松でした。』

此時です。『松』を持つて居る人が起上るのは。

嫁と姑

渚山生

口やかましいと人として若い者から厭がられる年寄は大抵女性に多いやうである。此口やかましいと云ふ性質は、多分生得でもありませうが、また若い時に感情の脩錬、訓育を、本人なり兩親なりが怠つた結果であるかとも思はれる。予なども餘り此種の老いたる女性を好まぬ方の側であるが、併し熟々其人物に就いて考へて見ると、思つた程には嫌ふに足らぬ事が解て來る。即ち、年寄つても一向に衰えず、顏色も艶々して、寒中に足袋も用ひずに、家内の若い者の鼻を明かせる程の勢ある老婦人は、只肉體が健康に出來上つて居るばかりでなく、元氣の根本たる精神機能の活動が少しも弛廢せずに、ぴん〳〵して居る故、勢ひそれが外に顯はれて來るのである。繰返して云へば、頭腦が確乎として餘裕のいくらもある、老朽事に堪へぬなど云ふ人には、全然反對の側に立つ、畢竟敏腕家の仲間である。

世の所謂家庭の風波、若くば小波瀾などの起る原因を其家に就て調べて見るに、大抵は前に述べたやうな老婦人が家族の中の一人となつて居る場合が多い。引換えて、老朽事に堪へぬ底の婦人が、或はそれでなくとも性情の極めて優しい、萬事に爭ひを好まぬ、孫などが能くなつく〳〵『善い祖母樣』かのある家は、奇妙に圓く收つて、其家の門を通ると、何時も樂しさうな話聲や笑聲が聞えて居る。

昔時から『鬼千疋』と迄歌はれた日本の姑達は、何でも餘程の惡人のやうに今日でも考へられて居るけれど、精密な觀察力で細かに其正體のある處を見破るならば、觀察者は噂の餘りに大袈裟なのに、吃驚して了うかも知れぬ。『化物の正體見たり枯柳』で、惡人とは其實、例の口やかましい質の人位が精々である。そして化物とばかり一概に思つて居たのは、全く一種遺傳的の想像に過ぎなかつた事となる。これは、啻に姑の場合ばかりでない。世の中の騷動大事は、總て此樣な風の誤謬が原因となるもの。斯う云ふと如何に世故

六　母の食物と其乳

母が多量の蛋白質を食へば蛋白質の多き乳を出し、多量の澱粉砂糖脂肪を食へは、其乳にも亦多くのバタと糖分を含む様になります。全體乳の量を増し其性質を良くするには、肉類野菜穀物などを適宜に混食するのが甚だ必要です。之に反して母に單純なる粗食をさせる時は、其乳に多くの水分を含み性質が惡くなります。

七　母の精神と其乳

母の乳と其心の狀態とは甚だ密なる關係のあるもので、母が其神經に急激の變化を受けた時、或人が其乳を分析して、水分の増加と固形分の減少を發見したさうです。又母が乳を呑ませつゝありて、俄に激烈なる感に打たれし時、其子が直ちに哺乳を止め、悲鳴をあげて即死したと云ふ事が傳へられてあります。總て愕にも喜にも母の情を動かすは哺乳の爲に有害な事で自分が抱いて居る子を過つて落した爲、一時に乳の分泌を止め、又愛らしき子の顔を見て喜悦の情に充るゝ時にも、思ふ様に乳が出ぬと言ひます。これは動物に於ても同じ事と見え、乳牛から其子を離して之を怒らす時は俄かに乳の量を少くしたり、又新しき搾乳者は其牛に馴れた人ほど多くの乳を取り能はぬ事も、確かなる事實であります。

八　母體の異狀と乳の變化

月經時の乳は子の爲に害ありと言ふ說もありますが、母が此時期を限つて患ふる他の病氣であらば格別、普通の月經と乳の變化とは少しの關係もない様です。姙婦の乳は初乳の如く粘液と多量の鹽分を含み、且つ酸敗し易き性があつて、それが爲に子の嘔吐下痢などを起す恐れがあります。故に姙娠が確定してからは成るべく早く乳を離さねばなりません。母の疲勞と睡眠不足とは乳の量を減じ其性を惡るくします。又貧血、神經衰弱、脚氣、梅毒、其外種々の傳染病を患ふる母の乳は、往々子に害を及ぼす事がある故、これ等の病に罹りたる人は、哺乳について醫の指圖を受けねばなりません。藥品の内にも鐵砒素、水銀、大黃、コロラ

ール、サツシール酸沃度劑など、母乳を通して子に感するものが澤山あります故、哺乳期には殊更、醫師の與へたものより外妄りに藥を用ゐぬ事です。

九　乳の缺乏

母乳缺乏の原因は澤山ありますが、其內最も重なるものは、出るべき乳を怠つて呑ませぬ爲、次第に出ぬ樣にして仕舞ふ事です。哺乳に經驗なき初產婦や神經質の母などは、其乳頭が短いので旨く子が吸はぬとか、或は容易に乳が出ぬと言ふ樣な譯で、一日に二度か三度より多く試みず、若し吸はせたら出る乳でも、終に出ぬ事として斷念する樣になります。然るに之と全く反對の子のなき婦人でも又男子でも、屢つとめて吸はせて居れば終に其乳が出る樣になるのです。其實例として、八歲の少女が其弟に乳を呑ませた事、七十歲の老婦が二十年間吸はせずに過した乳を以て其孫を養ふた事、アメリカに於て五十五才の黑奴が其主人の子女數人に悉く乳を與へた事、其外探險家によつて傳へられた未開國の話には、まだ／＼驚くべき事があります。今一つ乳の少くなる原因は貧乏と言ふ事であります。貧困則ち食物の缺乏は營養不良と、生存競爭に餘儀なくせらるゝ勞働過多と、之に伴ふ現象として長時間母と子が別れて居る事、此三つの方法によつて乳の缺乏を來すのです。併ながら此貧困を一般に救ふと言ふは些々たる慈善事業などの能くする所でなく、社會問題の解決を待たねばならぬ事で、自ら此お話以外の事になります。

十　乳を殖す法

故に、乳を殖すに最も自然にして且つ最も良き方は、之を吸はせる事です。乳が少いとか子が吸付き難いと言ふ樣な場合にも、屈せず撓まず元氣を皷舞し、而かも其腦髓を冷靜にして、少くとも前に述べた規定程、屢之を吸はさねばなりません、若しも自分の子が好んで吸はぬ時は、他人の子を賴むもよろしい、大人に吸はせても宜しい。又生れてから間のなき子犬を乳につけますと、啻に口を以て巧に吸ふのみならず、其前足を以て適度に乳房を按摩し、凝固まつた乳を緩和す

るに此上もなきよい方便です。これは西洋人が普通に行ふ所で、我國の婦人方には甚だ變に思はれんも、事情の許す塲合にはお試あらん事を望みます。尚乳母の攝生法として數ふ心きは、第一其精神を快活にし神經に激しき感動を受けぬ樣注意する事、第二清淨なる空氣を呼吸して適宜の運動を爲す事、第三其食物に注意する事です。

乳母の爲には如何なる食物が適當であらうか、これは其人の體質と習慣にもよる事で一概には言はれぬが、先づ魚類、肉類、穀物、野菜、菓物などを混食するのが必要であらうと思ひます。殊に貧血にして營養不良の母には、隨分濃厚なる物を與へ、多血にして肥滿した婦人にはいくらか脂肪や肉類を制限し、戸外の運動をさせるが宜しい。食物として特に乳を增すの効あるは、實驗上牛乳などが餘程の價値がある樣です。又ビーア、ポーター、エールの如き麥酒類を毎日一二回與へるのも宜しい、これは特に貧血にして虚弱なる婦人に適當な飲料です。オートミール、ポリッヂ（燕麥の粥）も亦可なり効験があるもので、西洋の乳母には之を與へると直ぐに乳がさして來ると言ふものがあります。其外多くの藥味香料の樣な刺激物も乳を增すの力はあるものですが、これ等の乳を通して子に害を及ぼす程多くを用ゐてはいけません。

尚醫の方でも、或藥劑又は電流などを用ゐ、乳の分泌を促がす手段はありますが、私はそれよりも前に述べた點を參考として母自身の攝生に注意せられん事を希望致します。

◉常盤七草＝（四時の七種）

文政年間、大岡雲峰翁、四時のながめにあかぬものを七種選びて、常盤七草と號して當時名家の狂歌の讃を加へ、同好に贈りたるものはこれ、

△きじむしろ　（眞顔）
あひれするとこはの草の雉子筵四季ながら野にかすれ見えけり

△ゆきのした（虎耳草）　（石樹）
猫ならば雨にならんを霜雪にこしても枯れぬ虎の耳草

△吉事草　（飛馬）
こがれ華さく陸奥の名に愛づる吉事草とてしろがれのはな

△藤撫子　（京山）
おひたくば岩の肩にもおはれなむ藤なでしこの霜にはうとも、

△すみれ、　（蜀山人）
紫のすみれつまむと赤人も美どりの野邊にひとよねにけり

△岩桔梗　（鶴山）
うごきなき御代を常盤の岩桔梗露もちとせのゆかりとぞみる

△かたばみ　（大眷）
あしびきの山吹に似しかたばみの花は霜にしくちなしのいろ

學者の細君へ

二葉生

天下の學者の細君へ申上げます。

皆さんは一家面白く花見に行かふと思はれる時に、主人が試驗室や書齋にクスぶッて居る爲め、勝手にのみグズついて居らねはならぬ時もありましやう。それから皆さんが今日は天氣がよいから朝飯を早く濟し、あれもし之もせねばならぬと思ッて居られるのに、主人が胴卵かけて未明に出掛けたのが俄かに歸ッて來ぬこともありましやう。かうゆふ時には自分の胸算用がガラリとはづれるものだから、試驗室や書齋から出て來た夫に必ずプンつかれるであらう。山野の跋渉から汗ジト〳〵となッて來た主人を泣きっ面で迎へられることもあらう。それは御尤もである。我が輩は少しもワルいとは申しませぬ。が、少しく察しを深くしてプンつかれた主人になッてみると、これほど割のワルいことは世間にない。自分は學術研究の爲め、趣味の爲め、少し長居をしたからとて、平常世間のものに狂ひ視せられた上、妻に迄プンつかれたりガミ〳〵されたりするのは、ちやうど極樂で閻魔樣に逢ふやうなもの。で、氣持のワルいことの骨頂であります。しかもそれを『これも自分日常の敎育と示導がワルい爲めだ』とグッと堪へるか、或は少しばかりのガミ合ひで終り、直ぐ又、敎員とか官員とかと云ふ、趣味や天職以外のことを、いや〳〵ながらするべく、アア出懸けねばならぬのです。

と云ふと天下、最も哀れにして氣の毒なのは、世の遠近の塵の中に埋もれて居る學者で、最も同情を寄すべきも彼等である。けれども此の難場を通り越して、も、一生學術研究者を以て終るものは少い。然り、人の力としてそれが出來ぬのである。僅か一年か二年の戰爭に一身を捧げるさへ、幾多世間の同情と優遇功名が要るのに、一代身を學術に捧げるに妻一人の同情と贊成を得ぬのみか、飯時に書物讀んだと云ッてプンつかれ、讀書中呼んでも返事せぬとて一々立腹されては、

どうして堪えられやうだ。殊に高い山へ登ると云ッて危いと止められ、旅行好きだと云つてクドかれては、それを大事の大事の事、急にせねばならぬことゝして居る、科學者や、傳道者（これはチト違ふが或る程度までは、主義の人たる傳道者、學者に同じいと觀る）のどうして細君の要求通りにすることが出來やう。尤も結婚當時からお互の所思、お互の主義を明かにしてお互に敎養し合はふとは決心して居るものゝ、未だ修養中の青年同志だもの、どうして氣に喰はぬこともウンと堪へて、之も學術の爲め主義の爲め理想の爲めと、慰め合ひ助け合ふ餘裕が出て來ましやう。アヽ玆に至ッて私は頗る惑ふのであります。それは家庭の和樂を學術研究の犧牲にするからです。

玆に於て學者先生も、遂にとてもこれでは家も身も立たぬと間違ッた考へを起し、敎員をして居る者は、校長になり高等官待遇とかを受けやうとする。官吏になッて力まうとする。官吏をやりながら研究して居るものならば、永く此の位置を保たうとする。と云ふ工合にして遂に虚榮の人となり、一生を誤り社會を誤り、天職を投げ打つてしまうのである。實に大遺憾、大損害のことで、人類の爲め、個人の威嚴の爲め、學術の爲め趣味の爲め、且つは思想操守の爲め、泣くべく悲むべく惜むべく善後の策を講ずべきことである。

一體學術研究（殊に科學に於て）と云ふことや、主義や理想の傳導と云ふことは、何時でも世の俗衆から侮辱と冷笑を蒙むるものであるが、此の裡面に於て、其の事業が追々進むの快を得、且つ細君たる人の大なる同情と贊成さへあらば、あらゆる外界の迫害、侮辱、冷笑は却ッて興奮劑になッてよいのである。と云ふと或は、妻の同情と贊成が無くて出來ぬ研究は、それがあッたとてやはり駄目だと云ふ人もあらう。が、そんな人は既に語るに足らぬのである。世に細君の同情と贊成と助力に價するものは決して無いのでありまして、幾億の黄金も大臣の地位も之れに比べると土塊と撰ばぬ。イヤ土塊に劣る萬々なのであります。

そこで吾が輩は、皆さん即ち天下の學者、學者の玉

子、主義理想の傳導者（新聞雜誌記者も含む）諸君の細君達に相談します。皆さんはどうか這般のことに關する御意見と、現に實行して居らるゝことの効果及び學者たる夫の行爲に對する不平とを本誌で公にして下さつて、其の上家庭へ新空氣を注入され居る諸先輩の意見も伺つて後、お互の修養に依つて、這の事に對するよい手段と確信とを得るに勉めて戴きたい。余輩も微力ながら、單身自然物研究者の玉子を以て任じ居るもの、從つて妻の意見も本誌で公にさせます。

若しそれ皆さんの我等學徒に對する要求及び不平は成るべく容れるやうに勉めます。イヤ勉めてもらひます。從つて皆さんは夫の事業に同情と賛成とを表せられ、其の苦心に對しては慰藉の勞を取り、一歩進んで出來る丈けのことは研究の手傳をせらるゝやうにお願ひする。さすれば底に修養と趣味とを得られ、夫の事業を窺ふを得る上、自然諸君の威嚴も特質も養成され、職分を全ふせらるゝことになるだらうと思ふ。政府の御陰で研究して居る人は兎に角、單身を學術に捧げ、パンを得る餘暇にあらゆる苦心を冒して研究に餘念のないものは、いつも研究に追はれ通しで而かも寸暇だにないのみか、前にも云ふ通り此の爲めに家庭の和樂をさへ犠牲にするくらゐだから、此の時に僅かでも細君の手傳があつたなら、如何に夫に滿足を與へ勇氣を與へるかは、局外者の到底知り得ることでない。

吾が輩は、世の塵の中に埋れながら、希望の光りに輝ける幾多學術研究者の爲めに氣を吐き、ダイアモンドの光以外、學術と趣味との光りを浴するを得る光榮ある細君達に、將來の爲め相談すること右の通りであります。

匆々不一。

家庭と誕生日

家庭と誕生とは離れ難い關係があります。西洋では死んだ人の年忌や追悼會までも、総て其人の誕生日を待つて行ふ位です。日本でも自分の誕生日だと云ふと、お肴などを買つて出世を祝ふ習慣がありますが、年に一度の紀念日であるから、今少し奮發して、趣味の深い會合などを知合を招いて開き、招かれた知合は招く人の好みさうな品物を一々持參するなぞも妙ではありませんか。

鑛毒被害地見舞の記（つゞき）

小林やす子

◎谷中村は幕政の頃には代官領として近郷に鳴り響いた部落で、土地も豊かに豪農も少なからず、明治十七八年の頃までも尚ほ俤を留めてゐたが、一たび鑛毒といふ魔の神に襲はれてからは、前號に記したやうな悲慘極まる運命に陷つて了つたのです。若しも今の内に鑛毒を遮り留める策を爲なければ、獨り谷中ばかりではない、最寄近在にまで害毒の流れ込むのは、智者を待つて後に初めて知るまでもないのです。

◎それから一行は休息の爲めに、同村に名高い雲龍寺といふ寺院に行きました。昔は本堂山門の壯麗目を驚かすばかりであつた法場も、度々の水害に遭ふで、屋根は剝がれる、壁は落ちる、厨裡の床板は雨に朽ちて鼠の荒れ廻はるに任せてある、勿論疊などは一枚も敷いてない、僅かに古莚三四枚を並べて、幾個かの家族の已に住家を失つた罹災民が、寒く淋しく雨露を凌いでゐるのです。墓地の石碑はと見れば、大概は倒れ頽れて香花を手向ける便もなく、見渡す限り荒涼として、地は一面に水害の名殘の砂原です。平和を惡み人類を呪ふ所の怖しい魔の神（鑛毒）は斯まで暴威を揮つて、人の家屋を毀ち人の田畑を奪ひ人の生命をまで危くせんとするに飽きたらず、心の光の信仰を捧ぐる佛の靈場をまで蹂躙つてゐるかと思へば、實に得堪えぬ悲感に打たれ、人々暫しは言葉もなかつたのです。

◎村民が幾十回の請願も哀訴も政府議會の顧みる所とならず、畏れ多くも直訴までした田中翁の至誠も天聽へは達せずして、今は只死滅を待つより外はない不憫の村民も、有繋に自暴自棄するに忍びず、せめては農作の外の工業でもして、生き延びられるだけは生き延びんものと、先頃一つの工場を建てたとの事に、一行其工場へ行つて見ると、工場とは名ばかり、見すぼらしい茅屋の極端に言へば一つの板小屋の中で、北海道に産する柳の木を編んで外國婦人の帽子にする原料を作つてゐるのです。元より手間賃も極めて廉いさうで、

十二三才位の疲衰へた女の子が十八ばかり仕事をしてゐました、此の工場は故潮田千勢子女史の經營で、女史歿かりて後姑らく中絕してゐたのを今度ライオン齒磨の小林富二郎氏が慈善の爲めといふので、再び工場を開いたとの事です。

◎小學校をも一覽しましたが、此はまたお話しにならぬ破れ小屋で、脚の曲つた机、板の狹い腰掛が十數脚あるばかり、外に何等の設備があるでもなく、此が學校かと思はれるほどの哀れな光景、元より衣食の足りぬ村の事ですから、學校の完全を望むことは出來ぬが、寧ろ學校が無いのなら無いで好い、憖ひ其の名があるだけ、村民の心情が思ひやられて、氣の毒やらいぢらしいやら。

◎尙ほ雨を冒して水害の溢流せる頹れた堤防の處へ行つてみると、其所に罹災民が簑笠で百人ばかり集まつてゐて一行をば迎へました。黑澤幸內の兩氏先づ熱心を籠めた談話をして村民を慰さめ、最後に田中翁が善後に付ての演說をしました。罹災民は始終泣いて此等の談話を聽き『何卒何分よろしくお願ひ申します。』と手を合せて一行を伏し拜むのです。傍に見る目の何んでなに切なかつたでせう。幸德夫人も私も飮泣を禁め得なかつたのです。

◎此夜は伊毛野といふ地の加藤喜造氏方へ一泊しました。此夜いろ〳〵の談話あり、谷中村は北の方赤間沼を控へ、東北は思川、巴川あり、南は渡良瀨川あり四面川に包まれたる水鄕にありながら、水害と鑛毒の濁流との爲めに魚も漁れなければ貝も採れず、村民は此數年來魚肉の味を知らぬといふ事、飮料水が不潔で不充分なるため『日本全國平均の統計に依れば生者は三、死者は二の割合』なるに、谷中村は之と逆比例をしてゐる故、生民年每に減じ行くといふ事、取分け鑛毒の結果榮養食料不足の爲め、婦人の乳汁缺乏して乳呑子の生育頗る惡しき事など、悲しき限りの話しを聞きました。

◎朝の食膳に米の御飯と丸燒にした薩摩芋のあるのを見て、田中翁は家人に向ひ、此れは日本の米だが何し

て村にありましたと尋ぬれば、お客樣の爲めわざ〳〵藤岡町まで行つて買つて來ました。家の者も三年振で米といふものを見ましたと笑ふのです。嗚呼此時の『笑ひ』何といふ悲慘な笑ひでしよう、所謂悲み極まつての泣笑ひ、世にこれほど切ないものが又とあるでしようか。

◎水害を防ぐ爲め防水工事を起して下さいと、長年の間政府と議會とへ請願しても、お聞入れがない以上は今更仕方がない。此上は村民力を合せて、不充分ながら自ら工事に取り掛らねば、此冬を如何にして過すべきか。寧そ死ぬなら村民一同堤防を枕にして死ぬのが本望なりとは、既に村民の一致した決心で、一行中の大島氏は、次の日から其準備にかゝると言はれてゐました。

◎此日もまだ雨が歇まず、路はます〳〵惡くなるばかり、女の足では所詮巡覽は覺束ない故、一行の人々に別れを告げ、幸德夫人と幸内氏と私と三人は兩國行の汽船に乘りて、また都の人となりました。（をはり）

子供の遊戯

花骨牌を利用して多人數の遊べる方法を新案しました。まづ十二人の小供を一室に集め、それへ一々花札（一月より十二月迄）を與へて、輪をかゝせます。そこで、別に中央に一人、此人が面白い話を出鱈目にしやべり立てる。そして其話の中へ「松」とか、「雨」とかの呼名を入れるのですが、それに呼ばれた人（花札を持つて居る人）は即座に立上つて『はい。』と返事をせねばならぬ。若し此時茫然して居て、呼ばれても起たなかつたり、又飛んでもない時に立上つたりしたならば、其人は負けになるのです。それ故、中央の人は其負けた人に藝をさせるか、罰を附けるか、それは定め次第で、何とでも興味が付けられます。

こゝに一寸注意して置くべきは、中央の人の話の仕方です。假令へば次のやうにせねばならぬ。『……それから私は眞暗闇の庭へ飛び出しましたが、忽ち私の目とも云はず、鼻とも云はず、痛々しく私を刺てかゝつたものがありました……』と云つて、暫時猶豫し、さて改めて『それは松でした。』

此時です。『松』を持つて居る人が起上るのは。

嫁と姑

渚山生

口やかましいと人として若い者から厭がられる年寄は大抵女性に多いやうである。此口やかましいと云ふ性質は、多分生得でもありませうが、また若い時に感情の脩錬、訓育を、本人なり兩親なりが怠つた結果であるかとも思はれる。予なども餘り此種の老いたる女性を好まぬ方の側であるが、併し熟々其人物に就いて考へて見ると、思つた程には嫌ふに足らぬ事が解て來る。即ち、年寄つても一向に衰えず、顏色も艶々して、寒中に足袋も用ひずに、家内の若い者の鼻を明かせる程の勢ある老婦人は、只肉體が健康に出來上つて居るばかりでなく、元氣の根本たる精神機能の活動が少しも弛廢せずに、ぴん〱して居る故、勢ひそれが外に顯はれて來るのである。繰返して云へば、頭腦が確乎として餘裕のいくらもある、老朽事に堪へぬなど云ふ人には、全然反對の側に立つ、畢竟敏腕家の仲間である。

世の所謂家庭の風波、若くば小波瀾などの起る原因を其家に就て調べて見るに、大抵は前に述べたやうな老婦人が家族の中の一人となつて居る場合が多い。引換えて、老朽事に堪へぬ底の婦人が、或はそれでなくとも性情の極めて優しい、萬事に爭ひを好まぬ、孫などが能くなつく『善い祖母樣』かのある家は、奇妙に圓く收つて、其家の門を通ると、何時も樂しさうな話聲や笑聲が聞えて居る。

昔時から『鬼千疋』と迄歌はれた日本の姑達は、何でも餘程の惡人のやうに今日でも考へられて居るけれど、精密な觀察力で細かに其正體のある處を見破るならば、觀察者は噂の餘りに大袈裟なのに、吃驚して了うかも知れぬ。『化物の正體見たり枯柳』で、惡人とは其實、例の口やかましい質の人位が精々である。そして化物とばかり一槪に思つて居たのは、全く一種遺傳的の想像に過ぎなかつた事となる。これは、啻に姑の場合ばかりでない。世の中の騷動大事は、總て此樣な風の誤謬が原因となるもの。斯う云ふと如何に世故

に通じた老成人の口吻に似るやうであるが、實際の話であつて見れば、仕樣がなからう。

一體婦人が姑と云はれる程の年になると、家事にはもう申分なく熟練し、少し交際家でゝもあらうものなら、世間の事にも可也に經驗を積んで居るのが順序である。其矢尖へ持つて來て、時代が違ひ、教育が違ふとは云ひ條、家持の事には全然外國人の若いお嫁が輿入て、居心のよかつた自分の席へ座り込む譯である故、習慣上でも餘り心持がよろしくない。尙ほその上に萬事に迂濶な馬鹿叮嚀な腕前を見せ付けられて見れば、つい〳〵はがゆさに口を入れたくなる、手が出して見たくなる。これは人情である。強ちにうるさき關渉とばかり見て、姑を又なく恨むのは無理である。

口やかましい婦人の腕前は、斯う云ふ時に初めて冴える。それは惡氣でするのでない。世話が燒きたくてならぬからである。それ故、姑らく嫁が控えて姑のなすが儘にして居れば、彼女はどんなに勞力を費しても、世話を燒く爲なら喜んで何事でもする。予が過般ある

新夫婦の轉居を手傳ひに行つた時、そこに一人の老婦人が居て、働いて居るのを見た。後で聞けば其細君の母親(但し繼母)であるとの事であつたが、上方の人でなか〳〵確乎して居る。其時予は獨りで思つた。『は、あ、此婦人は例の口やかましやの一人なるべし。』と。果して、想像の如く、言葉は頗る鋭い。時には憎々しと思はれる程の口を利く。身體も丈夫であると見え、今二階で何か采配を振つて居るかと思ふと、一分後にはもう臺所で、手傳ひの男達を追廻して居る聲が聞える。斯う云ふ風であるから、豫て柔和しい評判の細君などは、何處に居て何をして居るのやら全く解らぬ。それも其筈であらう。此六十路に近い老婦人が、其日の轉宅騷ぎを一人で負つて立つて居たのである。尤も、以上の例は直に嫁と姑の場合にはあてはまらぬが、歸着する所は同じであらう。次の日予は其家の主人に對し、『隨分確乎した人だが、君はどう云ふ方針を取つてあの年寄に接して居る乎。』と尋ねたが、彼は流石に善き感情を持つた人物丈に、其答は頗る予の意を

得たものであつた。即ち要點を摘むで見ると、『うるさくはあるが、些々たる事故なすが儘に任かして置く。』――如何にも寛大な處置、所詮深い惡意や根底などのないのが、やかましやの本性故、これに對しては全然無抵抗主義に就くのが、最も當を得たものであると思ふ。やかましやの姑を持つた嫁御は、常に心得て無抵抗主義を奉せねばならぬ。若し夫れ嫁御自身が、姑と同族のやかましやであるならば、尙ほの事其蟲を抑える工夫を講せねばならぬ。總じて同じ性質の人はお互に衝突し易いものである。

予は世の美しき花嫁御に對し、負けるは勝ちの手段を取る事を强ひたいと同時に、又やかましやの姑の君に對しても、多少の要望を持つて居る。それは一旦世帶を新夫婦に渡したからには、其世帶はもう他人のものである事を自覺して貰ひたい。新夫婦には又別に新夫婦らしい趣味と嗜好とが備つて居る故、どう世帶の形式を代へやうと、それは兩人の勝手である。また、經驗の薄い嫁の遣り方に物足らぬ廉があつたにしても、些細の事なら辛抱して、凝然と雲行を瞶つて居るのが穩當である。何も嫁の遣方を現在見て居乍ら、それを態と見ぬ振りをするとて、誇らずとも善いことらしい。不完全は不完全丈にまた別種の趣味があるものだから、姑の地位にある人が萬事調はぬ新世帶を見物して、そこに云ひ知らぬ興味を見出さうと云ふのも、亦妙ではなからうか。

序に、新老兩夫婦の別居論に關しては、予に於て餘り多く云ふ所がない。即ち予の考へでは、必ずしも別居せねばならぬと云ふ法もなければ、別居してはならぬと云ふ道理もないらしい。何方にならうと、それは多く其時、其家の事情に依る事、機に臨み、變に應じて適當の處置に出るのが至當である。地體人類の高い理想から云ふならば、此世界では人と人とが一人でも相離れると云ふ事を許さない。乞食の子でも天地の愛の斷片であるからには、到底離れる事の出來ぬ約束があるのである。地上に家庭を作り社會を建てんとする者は、毎平生から此覺悟を大に把持して居たい。

元春さん

(小兒研究の資料)

麹町　建部竹陸

元春さんは私の長男で、少し發育は遲れて居る樣ですが、此年三歳の實に可愛盛りの兒であります。眞に家庭の王、愛の化身でありまして、たまに叔母さんに連れて行かれた時などは、全然春から秋に移た樣な感を起します。朝私が日々の務めに出る時は、出口にちやんと坐て「ハイチヤイ」の二三度も云て頭を下げるのです。務から歸つた時にも必す出迎へて「お歸りなさい」の意味なる「オチヤイリ」の語を發して、目を見張て私の帽子に手を出すのです。帽子を渡すとそれを持て「カーチヤン」の所へ行て渡します。「ホワイトシヤツ」を脱ぐ時「カラー」の落ちる事がありますと、「アヤ、アヤ」と云て、直にそれを拾ひ上げ、自分の頭に巻き付ける眞似をします、が「頂戴」と云へば「ナイ、ナイ」と云て片付けよとの命令を發します。私が衣服を着替て坐りますと、すぐ前に坐て私が「今日何をして居たかお話しをして頂戴」と云ふと、或時は「チヤーチヤン、オンブ」と云て晝間脊負はれた事を云ひ、或時は「バアーバ、ハイチヤイ」と云つ妻の母が來て歸た事を話し、或時は「バアーチヤン、ヂーチヤン」と云てお隣の叔父さん叔母さんにお話しをして頂た事を云ひ、或は「チヤツコ」(下駄)と云て自分が獨りで遊んで居た事などをお話しします。それから夕飯のお仕度が出來て「カーチヤン」がお膳を持て來て下さると、チヤンと定められた所に坐て、自分のものとしてある匙を持て「マンマ、チヤジ」を繰り返して、お茶碗に御飯を盛て下さるのを待て居ります。御飯が盛れると、その匙を「カーチヤン」に渡して、たべさせて頂て居ります。たまに御飯がこぼれると「マンマ、ナイ」と云て立ち上てそれを探し、あれば御膳に置き、無ければ「チヤーチヤン、マンマ、ナイ」と云て探して呉れの催促をします。若し探してもない時は「マイマイ、トツテ」と云て自分の前掛を取て見て呉れと云ひます。それを取てもない時は何だか物足らぬ顔付をして、立たり坐たりす

る事がありますが、大抵は「カーチャン」に頼み置きますと云ふ格で、落付て後の食事をします。一同食事が終りますと、私の所へ來て「オクチ、テテ」と云て口と手を拭て呉れと申しますから、必ず拭て上げる事にして居ります。これは私の性質として、食事後洗面するのを見て、遂に自分もソー云ふ事をするものと定めて居るらしいのです。それから、今頃の樣に寒くなりましてからは、豫て上げて置いた、古雜誌や古寫眞帖などを持て參り、「トーチャン、ホン、アテテ」と云て頁を繰て見せて呉れとの請求が出ます。若し私が新聞でも讀んで居ります時などでもと、私の膝の上に登り、共に其雜誌を讀まんとて、妙な聲を出して讀書の眞似をします。夏から秋にかけては、夕食後は私に抱かれて市中の散歩をする事と極めて居りましたが、此寒空に戸外の散歩はドウかと思ひ止めました。これは果して、ドチラが良いか私も未だ決定する事が出來ないのです。それが濟み、八時頃にもなりますと、ソロ〳〵欠伸のお迎が參りますので、直きに眠りに就きます。

寢る前には先づ「ベベ、ベベ」と寢衣の御催促が有て、それを着替へると床の上に坐りまして「オヤチユミナサイ」と云て頭を下げます。「サア御寢みなさい」と枕を引き寄せて横になりますと、大概「チヤーオチ、チヤーチヤン、オッパイ、チンチ」と申し、乳を請求します。晝間餘程疲勞して居た時などは私と共に雜誌などを見ながら、うすら〳〵と眠て、遂には全く眠入て仕舞ふ事がありますが、マアそれは極く少い事です。日曜日若しくは大祭日など私が休暇の時には、一寸私が買物に行く時でも、常に務めに出る時の樣に「ハイチヤイ」と云て宅に居るを肯きません。それ故郵書を投函に行くにも必ず抱て行く事に定めて居ります。又私が休暇の日には大概午前九時頃から宅を出て、靖國神社の境内へ散歩に行きます。その時は自分から衣服を替へよとて「ベベ、ベベ」と請求し、又私にも衣服を替へよと申します。衣服の着替が終りますと「チヤツポ、チヨーダイ」と云て自分の帽子を出せと云ひ、出して上げますとそれを片手に致し、片手には自分の靴

を出して參ります。靴を穿き帽子を被り、私の人指に縋つて出るのですが、出る時には「カーチャン」に「ハイチャイ、イッテマイリ」と云て御挨拶を致します。途で目に就きますものは馬、犬、猫、魚、花、水、鳥、旗、提灯、などで、目に就くや否や直に「オンマ、ワンワン、ハニャ（花）チョウチン」など丶私に知らせるのです。それに曾て物の大小に就ては教た事もありませぬに、オーキナ、ハチャ（旗）チーサイ、トト」など丶申しますが、これは自分で意識して居る樣です。靖國神社境内に入て第一に喜びますのが、前田侯寄附の金太郎が鯉を抱く噴水で、「チンチ、トト、ダッコ、チャー」を何返となく繰り返し、暫くは立て眺めて居ります。第二に喜びますのが、馬場にある日清戰爭の時鹵獲した石獅子で、「オーキナ、ワンワン、アーン」と自分の口を開て獅子が開口いて居るを示し、又「チーサイ、ワンワン、オンプ」と云つて、獅子の兒が親獅子の背に登つて居ることを話します。まあこんな散步に彼此一時間も費しまして、歸り途に就くのですが、此頃は衣服の重くなりました爲めか、返りには度々私の背を狙はれます。若し運動が少し過ぎました時などは、私の脊に負はれて一語をも發しませんが、歸宅しますと毎も「カーチャン」に「チンチ、トト、チャー」、「オーキナ、ワンワン、アーン」等のお話をします。こんな風で私の務めも毎日樂みになりますし、又日曜などには運動に出るのに、御互に待ち合ふて居ると云ふ有樣で、神が私にこう云ふ幸福を授けて下さりましたのを、深く謝するので御坐ります。（投）



內職論

本誌の讀者では可也古顏の一人なる橫須賀の宮本如雷子から、記者は過ぐる日一通の書面を受取つた。披いて見ると、全文が「內職」に關した事で、實は尠なからぬ興味を覺えて此等の文字を讀んだのである。先づは其手紙の前置きから揭げる事にしやう。

小生に一人の親友あり、十年一日の如く交り來るも、久數相別れ、友は東京の某所廣島屋と云へる家に夫婦同居して、每日官所に通ふつて居るのてす。小生久々で先日上京するとになり、端書を出して訪問するとを申してやつたのです。然るに、用事の都合で一日遲れて訪ふとになつた。相惡く夫妻とも不在なので、廣島屋の主婦に逢ひ、友はと聞くと「お役所へ」。では妻君は內職にでも往きますか。「否。」との答へ。小生は其儘歸宅して仕舞ました。二三日過ぎると、友から書狀が來た。開封して讀んで見ると、登闘らんや恨みのかずかずを述べた手紙である。

如雷子に寄せた子の親友の書信と云ふのが、それはなかなか得難い面白いものである。記者は此樣な面白い手紙を只の一人で味ふ事を好まぬ。暫らくこゝに其一部を披露し、諸君と共によくよく玩味したいと思ふ。

前略廣島屋の主婦が曰く、「今日御不在中に參られた客は、隨分瘋狂なことを云ふ人ですねー。妻君は內職にでも往きますかと。」此の噺を小生は聞いて、君に對する愛慕的感情は直に變じて仇的の恨みをげ胸中に蟠ましむるに至つた。君の一言に依て、廣島屋では大概僕の價値を見下げたのであろう。「今こそ東京へ來て、旦那だの奧樣だのと云はれて居るものゝ、國元では隨分貧困で、女房までに日雇取りをさせたものと見へる。」斯く臆斷推測をなすは必定である。實に君の一言は僕の妻を侮辱したのである。加之ならず、僕の品格を那落の底まで失墜せしめし暴言であるかと想ふと、恨み心根に徹し、忘するゝことが出來ない。實に殘念此の上もない次第である。東京に於て、有夫の婦が外勤してまで內職をすると云ふに至ては、餘程下流社會の人物なり。相當の生活をして居るものが、自分の家內をば內職にやるやうなものは東京には見受けざるなり。君よ、如何に親友でも君の如き無責任の口調を弄すると、遂には厚き交際をも絕つことになるよ。之は僕斗りではない。普通常識を備へたもの、比々みな然りであろふ云云。」

これに對して如雷子は早速返書を認めて、友人の許へ送つた。そして、記者の手許へもその謄寫を寄せられた。其中には隨分盛んな議論があり、尙ほ其論據を固める爲に、名家の著書などから內職論を拔萃し、只管友の迷夢を覺ますべく、其文叮嚀親切を極めて居たが、唯此の所には少々ばかり抄錄して子の意見の一班

を公にして置かう。

「内職云云の一言が、斯の如く親友の間を裂くほどの侮辱であろふか。亦親友の品格を那落の底まで失墜せしめるほどの暴言であろふか。十年一日の如く交際を絶て、面白き交りを失ふほどの過言であつたろふか。予は實に此の解决に苦むものである。此の邊の友の心情を解するにます〳〵困むのである。若し予は妻君は乞食にでも出ますか、淫賣にでも往きますかと他人に問ふたらば、それこそ侮辱なり、罵詈なり、暴言なり、過言なり。併し、内職其のものは正業なり。家庭の補助職なり。何の耻づる所があろう。隨分東京には有夫の婦が煙草や石鹼紙類を賣て、夫の役所から歸へるを待つの貞女もある。幼稚園へ乳母に通ふて、夫の職を補ふの賢女もある。内職と云ふても决してマッチの箱貼り、下駄の鼻緒、卷煙草の口付のみが内職とは限らざるなり。假令又たマッチの箱貼りにせよ、下駄の鼻緒にせよ、洗濯注ぎにせよ、正當なる勞働をして賃錢を求め、而して家計の補ひとするならば、正々堂々恥る所は毫末もあるまい。

若しも妻をして深窓に錦を重ね、閨房に綺羅を飾り、食するに魚を以てし、出るに車を以てせば、誰れか亡國の兆と見ぬものがあらう。ある人の言に、古より明君賢相皆奢侈を戒め、勤儉を奬勵す。学國今日の隆盛は、先王フリードリヒ第二世が奢侈遊惰を惡み、勤儉貯蓄を奬勵したる遺功に依るとある。……

斯くして、最后に相變らず交際をして貰ひたいと賴んである。無論この返書の中に顯はれたる子の意見に就いては、記者は全然異論がない。實に子の友なる某紳士の所論に對しては、果して如何なる挨拶を以てこれに酬いて宜しきや、記者に於て全く其判斷に苦むのである。

記者は忖度す。其若紳士はかの華族の若殿、「從五位」流のお坊樣ではなからうか。奥樣は所謂奥の人で、奥樣と云ふものはお姫樣のやうに美しく着飾り、家の一番奥の部屋へ、人にも見せず祀つて置くものであると云ふ、至極無邪氣な信條を奉じて居るお若い連中ではなからうか。さもなければ、只單に内職云々の一句位で、恨み骨髓に徹する迄の刺戟を受けやうとは、理に於て先づ信ぜられぬ。

世間には能くある話である。華族の坊樣などで、學問をせず、修養も積まず、氣隨氣儘に育上げられた人は、ともすると女のやうな神經家が多い。少しでも他人から氣に入らぬ事を云はれると、それが幼稚な頭腦には早鐘の如くに響き渡る。そして其反動には手當り次第に其邊の品物を打附けねば虫が休まらぬもの。子の友人の若紳士は何處か東京の官廳に勤めて居られ

ると云ふから、全く文字のない智慧のない人とは思へぬけれど、さりとて又餘り賢いお方とはどうしても受取れない。結局、記者は此東京の若紳士に向つて眞面目に多く論ずるの價値がないと思ふ。唯此若い御夫婦は、廣島屋とやら云ふ下宿(?)の一室で、日々生活のまゝ事をして居るのであると考へて置きたい。今後の彼等に取つては、この世の中の荒浪こそ、眞に此上なき藥である。小春日の暖さに玩弄澤山の花筵は敷いて居るものゝ、何時意地惡な時雨が降つて來まいものでもない。嵐が見舞つて來ないものでもない。其時になつて、彼等は初めて吃驚しやう。狼狽しやう。それも實に止むを得ぬのである。

記者はこゝまで書いて來て、筆を擱かうと思ふが何ほ少し物足らぬ。物足らぬのではない、まだ一つ忘れてならぬ重大な所感がある。それは當今の中流以下の家庭に於て、而も相當の學識と經驗とのあるべき筈の夫婦間に於て前項に述べたやうな坊樣流の思想が、隱然勢力を占めて居るのを認める事で、記者はこれを以て慥かに當代思潮の一大弱點と呼ぶ事を躊躇せぬ。

其思想の閃めきは果して何であらう。曰く虛榮、これ只一つ、明かに此意味である。そして、此虛榮の裡には浮華、淫靡、不信、あらゆる惡德が含まれて居て、これに觸るゝものは即座に毒される。世にこれより危險なものはない。試みに今日青年紳士が其若き細君と共に一家を持たんとするに當り、どんな條件を何より先に持出されるかを覗つて見るが善い。一に召使、二に門のある家、彼等は額に浮世の皺を寄つた、善い母親を持つて居ても、それは美しくないと云つて、年の若い無經驗な女中を雇ひたがる。衛生には惡いと知り乍らも、立派な門さへ建つて居れば、爭つて彼等は其非衛生の家を借りやうとする。そして、勞働を賤しみ、內職を貧亡人の仕事と呼び、一家の雜務には我手を下さず。斯して只管旦那樣奥樣の體面を飾らうとするのが彼等唯一の志願である。其心狀の卑しさよ。彼等の中には五年十年と隨分高等な教育を經て來たものが多い。理窟を云はすればなか〱高遠な意見を吐く。そ

れで居乍ら、互に其淺墓なる慾情を抑へるの勇氣なく、信念のない、自覺のない、頗る不眞面目な生活に慣らされて了うとは、實に情ない次第である。

近頃年若い紳士仲間では、女學校卒業の束髪との結婚をば、非常に恐ろしい事に考へて居るものがあると云ふ。其理由を聞くに「束髪女史を妻とするのは嬉しいが、自分の力量は果して彼女の強い虚榮心を充分に滿足せしめ得るや否や、それを思ふと怯氣が付いて手が出せぬ。」とある。何たる不見識であらう。彼にして若し自己の力量に自信あらば、彼は早速虚榮心の化身を娶つたに違いない。虚榮の心とはそれ程貴いものなるか、それ程美しいものであるか。云ひ換ゆれば、生氣のなき自由なき貴族の眞似をする事が、それ程價値のある事であらうか。如雷子の友なる人の書信中にもあるが如く、東京に於ては、斯かる小貴族が下宿の四疊半にさへ、往々にして生存して居るのである。假りにも志あるものは、決して此様な不健全な思想に感染してはならぬ。

記者は内職論を書かうとして、筆や却て遠くへ外れた。併し乍ら、今日の時代、眞逆に内職を非なりとする醉興者は先づないらしい。どんな苦勞知らずの若殿でも、「内職は善い事で而も金になる。」位は辨へて居やう。只それを實行し得ぬのである。實行し得ぬのは虚榮心のなす業である。或は虚榮心を拂ひ除ける勇氣がない所爲である。これ記者が内職其物を正面から見ずして、側面から覗いた所故也。

母の心得

善の方に小兒の希望を向はしむることは、何よりも必要なることで、母たるもの丶常に心すべきことです。母たるものは可成悪の方には自ら見向かぬやうにして、而して叱責又は折檻をなすために、悪と云ふ觀念の小兒の胸中に芽を生ずるやうな事をさせてはならぬ。そして、これを反對なる善の方の愉快にて目覺しき畫圖な、其眼前に横はらむることを勉めればならぬ。凡て過失は皆な德を欠くによりて生ずるもの、若し德にして養成せられなば、過失は其榮養の道を絶たれて自然と枯死します。併し、無理にこれを善に追入れても何の効もない、唯小兒をして自ら善に赴かしめるやう、養成し見よ、其効果は世の所謂「嚴格なる仕付け」よりも、遙かに大でありませう。(家庭敎育)

二葉園藝

エデンの花守

○冬季薔薇の手入

▲冬は植物休眠の時ですから、破格な寒さでさへ無けねば差したる響はないものです。併し鉢植は地植より其の土は温度の變化が多いから其の儘で置くのは宜敷ありません。で、冬はなるべく地植にするか或は鉢の儘で地中で一尺ばかり埋めると可いやうです。孰れにしましても屋外にあるならば、藁か莚で雪除けをこしらへてやらねばなりませぬ。唯だ是れ丈けで立派に冬越を致します。元來此の植物は寒氣に強いものでありますから………

▲なほ三上君へ申上げます。仰せの花の草丈は地方と出來によつて異ひます上、一々擧げれば餘りに長くなりますから、成るべくは貴下の御作りになる花の名をお聞かせ下さい、さすれば大體を申上げませう。

▲それから日光の當らぬ場所に作る花は、サフランとか、萬年青とか、カタクリ、雪割草、ヤブコウジ、水仙、節分草、一輪草、二輪草ぐらゐのものでありませう。なほこのことに就いては今少しばかり申上げることもありませうが、一體花には陰濕地はイケないのであります。（三上君へ）

○花の育て方に就き

▲草花の移植に就き。花の種子を蒔き付けたばかりで移植せぬ方が却つて成蹟のよいのは、北陸や東北や北海道で、お國元のやうな暖地では、移植される方が可いのであります。御實驗を乞ふ。

▲花の肥料に就き。花によつて水肥の適せぬものは、基肥と云ひまして、植へ付ぬ前、其の畑を整地へる時に油粕、灰、下肥、米糠など或は此の中の一種と生草を腐らしたものか、廐肥の類と混せて、植へ下方へ埋めて充分腐らせ、成分を土壌に吸はせて置くことです。それから水肥も濃いと幼稚な苗を害することがあれど、薄いと案外ヒドくはないものです。それから所謂肥弱りする花には雨後に於て水肥を施すに、雨の降らんとする時にするのであります。

▲花の出來不出來。是れは咲た上で、其の花の形や咲きぶりを初め、莖や葉の形態も性質も、其の種類の特徴を發揮した者ほど上出來と申すのであります。勿論是れに反するのは不出來と云ふのですが、此の間の消息は栽培つて見れば、案外解におちるものであります。

▲なほ下司君へ申上けます。菊の種子は未だ賣つて居るのを聞きませんから御自身で御採りなさる方が面白いと思ひます。又、是れを鉢に栽せて賣つて與れるのは、南品川の妙華園初め大低の花戶であります。それから御送りの措葉は葉がなくて判りませぬが、多分カンナと申す舶來植物でありませう。

▲なほお問ひの外國の種子屋で私の信じて居るのは、亞米利加で左記の者であります。(下司君へ)

Wm. Henry Maule & Co.
1711 Filbert street, Philadelphia
Pennsylvania, U. S.A.

○玉葱の特効　(寺田君へ)

▲ちやうど玉葱の澤山ある時節ですから、少し委しくお答へして皆さんにも充分讀んで戴うと思ひます。

▲葱類は蔬菜中、食料として最も適當有効なもので、滋養價値の多いのに、玉葱は其の中の最良品であります。故に第一、

▲食慾を增す一種の藥劑的效能があります。若し我々が食慾の減じた場合には、是れを細く刻んで酢醬油を加へ鰹節を掛け香の物の代りに、生で數日の間用ひますと、食慾を增して健康を恢復させること不思議な位ゐです。それから、

▲不眠症の人には一種の睡眠劑となります。是れは神經を柔げ休息を與へるアヘンを含んで居るからであります。又た、

▲我々が寒む氣を覺え、風邪の氣味と思ふ時は多量の玉葱を前法のやうにして生食しますと、直に發汗を來し睡眠を催しやす。しかし煮たのはイケません。

▲玉葱は又た血液を淸潔にする作用があります。それは玉葱が他の葱類より硫素と云ふ成分を多く含んで居りますので、是が體內へ入つて他の成分の鹽類に結合し、所謂硫化鹽類を形造り他の有毒の酸類を變化して

有益なものに致します故です。

▲或る病院で肺病者に、玉葱や蒜で製した丁幾劑を與へますのは、是れが肺病者の養生物として効能あるものと信せられて居るからであります。

▲肉食者には特に其の肉類中の或る成分を容易に分解消化させる爲め、如何なる塲合にも併用の必要があります。

▲玉葱は下痢を止むる一種の効能があると申します。又たそれから衂血の時は玉葱を碎いて其の臭味を嗅ぎ或は鼻孔へ差入て置けば自然に止むそうです。

▲凡そ葱類は硫黄分を含んで居りますから、是を常食しますと傳染病の際はバチルスに犯され難い上、記臆をも增す作用があるそうです。（東京、愛讀生君へ）

＊　＊　＊　＊　＊

○吾が自然生活

＝浩山兄よりの手翰の一節＝

此の四五日めッきり寒さが增して、原宿は家毎に氷が張ると云ふ始末です。併し天氣がよいので、精神はいゝゝゝひきしまり頭腦は幾分明快の度を增して來るやうに思はれます。

秋には限りませぬが、人間の心の中に不平煩悶など云ふものが起つたならば、直ぐに自然に接するが宜しいのです。大抵の不平は其の洪大な大意味の中に融されて終つて、心が淸々するものです。私等は折々やります。自己の足ぬ所を發見して苦悶する時、或は他人に對しての不平、人の憐れなる運命などを思ふて悲しむ時、ちよつと郊外へ出て自然の平和な美しい景色を見ますと、急に心が樂しくなつて來ます。

このやうな時は朝が一番よろしい、旭は嬉しげに惠の光りを投げかける、鳥が鳴いて居る。殊に此の頃は霜にも怖す菊が笑ひこぼれて居る。實に美しい天地、かくて自分は自分の心の中に苦んで居る事が如何にも小さく、いゝゝねうちなく感じて、更に一種の悟りの道と希望の世界へ入るのであります。

鳥が鳴くと云へば、昨年あたりは家の近所で、所謂遊獵家の銃の音が、彼處にも此處にも響いて居たもの

ですが、今年は戰爭で遠慮したのか、一向聞えません。洵にい丶鹽梅です。ですから此の頃裏山ではいつも百舌鳥が來て、悠長に鳴いて居ます。

私の例の畠は、霜の爲めに大荒れです。蕃椒の葉、里芋の葉、其の他秋までの草花なども、殘物は四五日の霜で全くやられました。丸で毒でも注がれたかのやうに萎れてしまいました。其の代り菜類は意氣昂然として其隅に睥睨して居ります。此の間其内の一部分を浸し物として用ゐましたが大に珍らしく感じました。私は小供の時より是が好きです。下宿して居た時分に宿のお神さんから『あなたは鶯のやうです』と迄云はれた位ゐ。勿論鶯のやうなよい聲は持ちませんが、靑い物はそれ程好きであつたのです。

昨今の庭は小菊で奇麗です。これも一と奮發して世話すると好いのですが、花の咲いたのを愛するばかりで、咲く迄の處は、全くうつちやり放題ですから、好いものになりません。下の方の葉が枯れて、丈が高く、野生のものと變りがないやうです。併し慾張つて數丈けはたんと植え込みましただけに、咲き揃つたところはなか／＼見物です。色は白、赤、黃、金樺など、此の中で赤は一昨年來のもの、其他の三種は、昨年新たに買ひ求めて、繁殖させたのです。

大菊は緣日で二錢買ひ求め、椽側の直下に置いて日々賞して居ります。其の美しさ、淸らかさを見るにつけて、神の意匠の大きく且つ微妙なるのに、思はず襟を正して感謝するのであります。（十一月十日）

◎西洋の花日本の花　（伊豫朝日星子投）

前々號に、西洋の花と日本の花の香に就きて、申されましたが、色彩や形態に於ても私は次の如く考へるのであります。

日本の花は優美なること彼れに優り。西洋の花は艷麗なる點に於て日本を壓して居ります。而して是は四圍の關係＝氣候、風土、及び邦人の嗜好より働く觀念等＝によることが多いやうに思ふのです。或る人は西洋の花は勤勞の人の觀賞に適し、日本の花は是れに反對の人に適すると申しましたが、是は確に半面の眞理を云つてあると思ひます。

注意―此欄の御質問は直接左の所へ送つて下さい
加賀國鶴來町　久田實輝

三方ヶ原

遠江　午山生

余は引佐細江の湖畔に遊ばんとて、古戰場として有名な三方ヶ原を過ぎるのであつた。余は犀ヶ崖に至るころ思ひ浮べたのは、吾遠州人にて加茂眞淵翁につぎて歌人として知られ、余の吾田園詩人と呼ぶ石川依平翁の古戰場と題して讀める歌である。その歌は、

ふきあれし松の嵐はむかしにて
　枝もならさぬひくまのゝ原

實に戰爭の後には平和が來る、今は四百餘年の昔となつた。元龜三年の十二月、吹きに吹く木枯をものとせず、武田勢と德川勢と、此に雌雄を決せんと戰つた跡も、今や夏草は靑々として雲雀の床となり、兵士供の足跡も見へ分らんのであるが、而し閉目沈思すれば當年の光景はありありと見へるやうである。武田勢は濱松城何かあると侮るように側目に見て、三州長篠城を攻めんとするがの如く擬勢を張つた。斯くと見る德川勢は、其振舞に激して追擊しようとした。武田勢のおもへらく、敵は吾が術中に落ちたと引返す。暫くにして銃丸は飛び、劍鎗はひらめく。斬る、突く、組む、見る見る野は修羅の巷となり、高く擧がる鬨の聲、低く微に聞ゆるは傷者の呻吟、忽ち死屍は小山の如く、血は泉のように流れ、吹く風は鮮ぐさい。嗚呼悲慘、人生亦これよりの悲慘があろうか。

余は余の想像をこれ以上に馳せるを得ない。馳せれば余の傷情をますのみである。余は更にこの悲慘の生める結果を知らんと欲した。余の見るところを以てすると、斯日の戰爭は德川勢に於ては、犀ヶ崖の奇謀が成効して武田勢の英氣を挫いたとは云ふものゝ、德川勢は全く大敗北なりと思ふ。武田勢が餘り智慮に過ぎた爲め、却て全滅すべき德川勢をして、再擧の餘地を與へたのであつた。若し此日の甲州軍の大將が信玄でなくて勝賴であつたなら、德川勢の運命は此日を以て終つたかも知れないと思ふた。

余は更に思うた。解すべからざるものは戰爭である。否な戰爭の結果である。この三方ヶ原の戰ひに大勝利を得て武田氏は、他日長篠の戰ひに敗れ、遂には天目山の悲劇に終つた。これに反して、敗北した德川氏は其後諸所の戰ひに勝ち、最後に關ヶ原の役に勝ち、六十餘州を掌中に收めた。而し、その幸運なりし德川氏も、三百年の末には遂に敗者の位置に立つた。思ふに戰爭の結果は、復雜はしても其中に一の不變のあるものがある。それに、時間の短長はあれども、戰勝者の終りは戰敗であることだ。只武田德川氏のみで無くて、世界の歷史は如何なる時代に於ても、同一轍にこれを繰返して居ると思ふ。即ち蒔きたる種を刈るのである。劍に據て興きし種族や國家は亦劍に據て亡ぶるのである。

余は斯く考へつゝ何時となく長き三方ヶ原を過ぎ、右に御嶽山を仰き、左に引佐細江を眺めながら氣賀の町に入つた。

注意

左の四件、お尋ねに從つて臨時雜誌でお答へします。

▲二葉園藝（花好きの人の爲質問隨意）
▲家庭通信（讀者諸君よりの通信を揭ぐ）
▲西洋料理の栞（祿亭主人擔當にて質問に應ず）
▲讀者の顧問（新家庭を作る人に取つての相談役）

▲小　説『女夫波』

小説『女夫波』は一種の教訓小説で、長い間手際の拙い作者の所謂寫實小説に飽き果てた世間、それに極狹い見地に立つて藝術と云ふものを見て居た世間は、乾度此小説を歡迎したに違ひない。

作者が理想の傀儡たる主人公夫婦は、實に黄金萬能の現代にありて、天上に清く輝ける星辰の如きものである。良心の光明かに、情に厚く、そして飽く迄も自己の信ずる主義を曲げざらんとするの勇氣は、全く篇中の主人公夫婦に於て見る事が出來る。

余はかう思つた。若しも世の中の人類が悉くかう云ふ風の性格を備へた人ばかりになつたならば、如何に正しき社會が此地上に顯はるゝに至るであらうと。然り、正しき社會、余は此の點に於て作者の功績を認めるものである。但し余が余自身の藝術的嗜好によりて此の小説を味ふ時には、此の小説は餘りに理に走り過ぎて、情味の點に物足らぬ處のあるを發見するのである。併し乍ら、これは教訓的小説の弊として、大抵の場合に免かれ難い所、或は余の註文が全然無理であるかも知れぬ。

編輯便り

▲本年の終刊　本號が今年の終刊であります。戰爭は止まず、世の中は不景色だと云ふに、路傍の野花の如き本誌がさしたる影響を受けず、殆んど一年間、依然諸君と共に平和な語り、和樂を歡び得たと云ふのは、實に不思議な事態と申すべし。隨て、希望多き第三卷の新舞臺は平生の確信に對して一層の勇氣を與へる光明です。記者はこの光明に勵まされ、明年には更に新しき精力を養つて、再び諸君に見えませう。どうか善き年をおとりなさい。

▲神戸ＹＨ生へ　草花を蒔く方法注意は、本誌二卷第五號に委しく出て居りますから御參照下さい。尚ほ草花の素よきもの二十種指名せよとのお問ひに對しては、次號の問答欄で久田氏からお答へします。

▲やなぎ生へ　兄の御投書は次號に掲げます。

▲函館清月生へ　大に同情を表します。次號の顧問欄には、それに就いて記者の所感を陳じたと思ふ。

▲小供の研究　明年から上のやうな一欄を設けて、心理的、生理的、其他種々の方面から研究して見たいと思ひますから、材料のある方は記者の手許まで御投書下されたし。

▲寄贈新刊　神田の同文館から『英文歐米名士の家庭』本郷の昌平館から『戰と死』それに内外出版協會から『對譯英米名家詩抄』とが來て居ります。孰れも評は一讀の上の事に讓ります。

▲二號合本　例の如くクロースで美麗にこしらへる筈です。併し數が餘り多くない故入用の方は可成的急いで申込んで下さい。

◎田口掬汀君著

家庭小說 女夫波

口畫　鏑木淸方君繪
表紙意匠　平福百穗君案

前編六版後編四版

（定價各一冊六十錢）（郵稅一冊八錢）
（クーロス裝釘最美本）（小包料二冊拾錢）

女夫波は永遠の力として愛の發展を描きたる高尙純潔の家庭小說にして其女主人公は意思强き明治新婦人の好模型なり

女夫波は其讀者中一度び互に冷却せし夫妻間の舊溫情を回復倍加して一家團欒の破綻を救濟せし實績を有せり

女夫波は互に好配偶を得て愉樂なる家庭を造るべき活ける活訓書たると同時に詩趣橫溢の中に生活の眞意義を照耀す

女夫波は一家團欒の席に繙きて趣味と感化とを及すべき稀有の家庭向き作物として天下一般批評家の公認を得たる明治文壇の光彩なり



腦病 靜靖丸 頭痛

腦力を明快にし腦病神經病を全治す

腦病 にて常に頭重く、記憶弱力く、忍耐力薄く、氣鬱ぎ、不眠、頭痛を煩ふ人

神經 症にて僅の事を苦慮し、常に動悸、息ぎれを感じ怒り易く、悲み易く、心弱き人

逆上 症にて常に顔紅く、頭痛、眩暈し、耳鳴目かすみ、肩凝り背重く、便通少なき人

頭痛 症にて學生の常に煩ふ勉學性頭痛、感冒、徹夜、苦慮等より發する者其他總ての頭痛及ひ頭痛持の人

不眠 神經家又は老人等の夜分安眠を得ざる人、亦は苦慮、悲痛、等にて眠むられざる人

其他常に腦を勞する人及神經家亦は大酒家、肥滿家は持藥として此藥を服用せらるべし腦力を強健にし精神を快活ならしめ、中風、卒中風を豫防する希有の偉効あり、

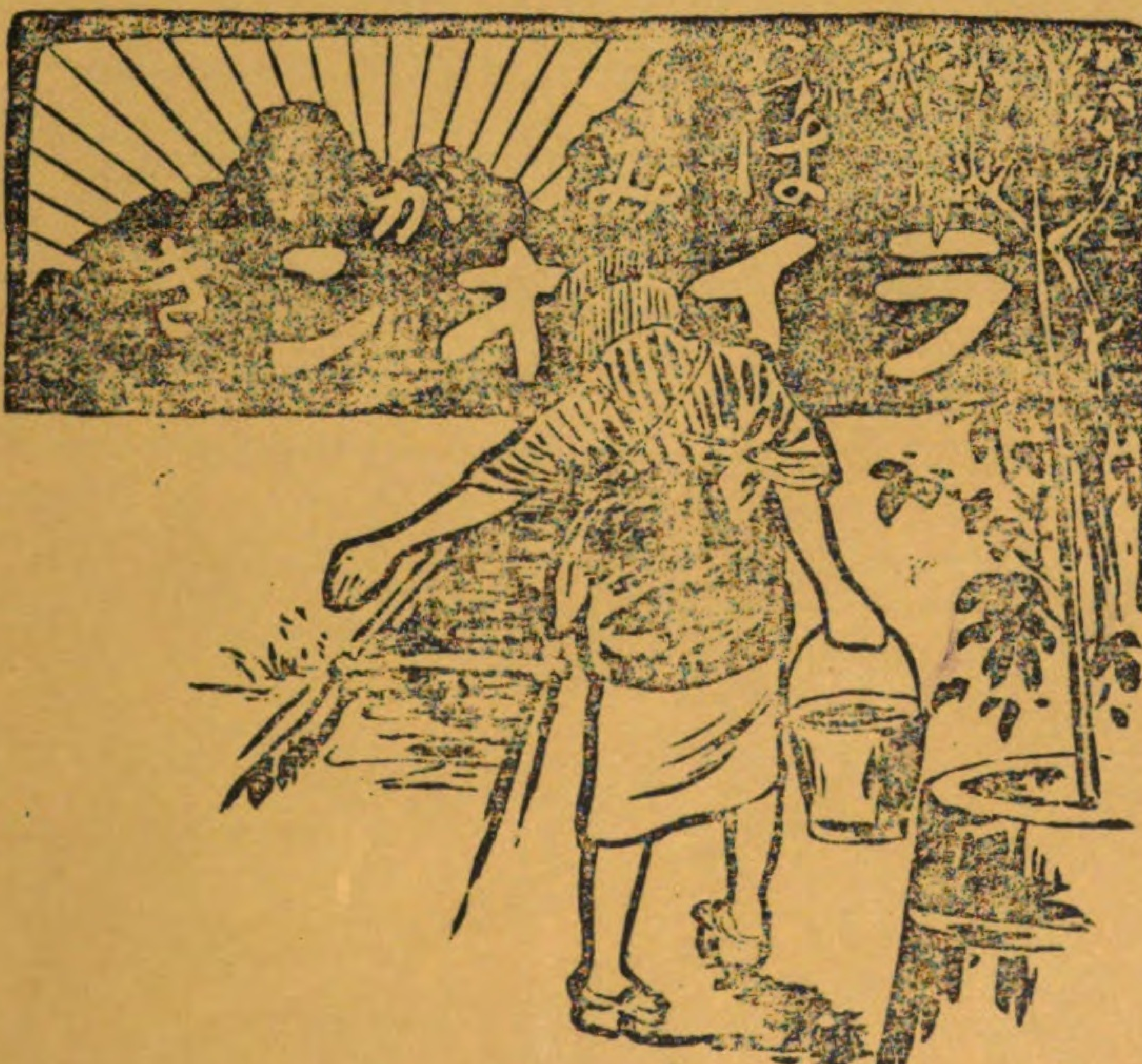
藥價 〔二日分弱金拾錢 廿二日分(常備用)金壹圓 十日分金五拾錢〕〔六日分金三拾錢 四日分金貳拾錢〕

本舗 東京市日本橋區 藥研堀町 藥劑師 高木與八郎

逆上を引下げ睡眠を催し頭痛を即治す

慈善券

ライオン歯磨小袋入に添付せり詳細は
實物に就き御承知あらんことを乞ふ



北米セントルイス萬國博覽會

名譽銀牌受領

粉製 **赤罐入** 發賣

意匠嶄新且つ優美なる彩色罐入にして頗る携帶に便なり能く香氣の發散を防止し終に至迄本品獨有の佳香を保つを得べし遠征の士其他旅行用に適せり

定價一箇拾貳錢

發兌元　大阪　**小林支店**

復刻版
家庭雑誌　全6巻
附／解題・解説・
総目次・索引

一九八三年二月二〇日発行
定価　四八、〇〇〇円
発行者　船橋治
発行所　不二出版株式会社
〒113　東京都文京区本郷三―一六―六
TEL〇三（八一二）四四三三／振替東京6―94084